色絵花鳥文皿（柿右衛門様式）
1670～1690年代（佐賀県立九州陶磁文化館蔵）

型紙摺唐花唐草文大皿（二彩手）1610～1640年代
佐賀県重要文化財（佐賀県立九州陶磁文化館蔵）
※本作品は武雄系古唐津です。

佐賀人は、器が違う。

江戸幕末に西洋の進んだ科学技術をいち早く取り入れ、明治維新と近代化に大いに貢献した佐賀県。
コロナ禍で様々な変容に対処しなければならない今の時代、
ものづくりのＤＮＡを受け継いできた佐賀人はどのように未来を切り拓いてゆくのか。
ゲストに日本オラクルの三澤智光氏を迎え、佐賀に工場を開設した化粧品ＯＤＭメーカー・東洋ビューティの岩瀬史明氏と
地場の土木・環境関連機器メーカー・ワイビーエムの吉田力雄氏、佐賀県知事・山口祥義氏が
新たな時代に佐賀県が果たす役割りや可能性、佐賀で事業に取り組むメリットについて語り合った。

佐賀県
知事 山口 祥義氏

イノベーション生む変革の地

日本オラクル株式会社
執行役社長 三澤 智光氏

ＤＸで企業の力を地域へ

東洋ビューティ株式会社
代表取締役社長 岩瀬 史明氏

メイドイン佐賀を世界に発信

株式会社ワイビーエム
代表取締役 吉田 力雄氏

人のつながりが産業を生む

ディスカッションの前半では「新たな時代と佐賀県」をテーマに、コロナ禍でもたらされた変革の時代に企業や地域はどう取り組むべきか話し合った。

冒頭、日本オラクルの三澤氏は情報化の進展によってデジタル技術と現実社会が融合するソサエティ５.０の時代の到来に向け、ＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）の重要性を説いた。「ソサエティ５.０の実現には企業のＤＸと、それを実現する地域の風土づくりの二つが求められる。企業のＤＸは既存の事業を支えてきた仕組みと、新しく開拓する仕組みの相乗効果が出るようにデータ活用に注力した変革（データ・ドリブンＤＸ）が重要だ。ＤＸが進めばデジタル技術で社会課題を解決しようとする企業が増えてくる。地方や行政はそうした企業の力をスマートシティ実証などの場を作りうまく活用していくべきだ」

これに対して、佐賀県の山口知事は「ＩＴ技術をどうやって世のため人のために生かすかを考える『ＤＸ脳』を鍛えるべき」と応じる。「佐賀県で『ＤＸ脳』を鍛えるために進めているのがダイバーシティだ。全国から、佐賀県に様々なキャリアを積んだ人たちが集まってきており、現在、県の行政職員の１２％が中途採用。こうした人財の力も生かしながら、既成概念にとらわれずにイノベーションを進め、ビジネスチャンスを生み出すのが私たちの仕事だ」

人、技、志で変革を

佐賀県の地域性について、ワイビーエムの吉田氏は、品種改良や、たゆまぬ技術革新により全国を魅了する佐賀米や佐賀牛などを作り上げてきた農業を例にあげ、佐賀県の地域性についてこう語る。「農業は我慢強く根気のいる仕事で、佐賀人に向いていたのだろう。じっくり考えて色々なアイデアが出てくる人が多い。新たな技術の取り込みにも熱心で、昭和の終わりには産学官連携に取り組んだ」と語る。

一方、東洋ビューティの岩瀬氏は、コロナでインバウンド需要が消滅した苦境の時代だからこそ、情報発信が大切だと語る。「新しい佐賀工場は世界に通用する厳しいレギュレーションに対応した工場だ。県が進める化粧品関連産業の集積地づくりはフランスのコスメティックバレーとも連携している。新工場はものづくり拠点にとどまらないメイドイン佐賀の新しい化粧品を世界に届ける美の発信基地としたい」

佐賀県企業立地ウェビナー
会場協力
イノベーションパートナーズ「VOGUE」
（佐賀県嬉野市）

ここで、山口知事は社会を変えようとする佐賀人の気質を示すエピソードを紹介する。「佐賀は鍋島直正や大隈重信が活躍し、薩長土肥の一角として明治維新を実現させた。しかしその後、変革を進めすぎた江藤新平らが政府から離脱しておこした佐賀の乱（佐賀戦争）の反動なのか、佐賀県は明治９年に長崎県に統合され、１６年に分離独立するまで空白期がある。変革は『人の力、技術の力、志』の３つがあって成し遂げられるもの。これからの新しい時代、明治の空白期の分も取り戻すくらいの強い気持ちで、多くの“力”と“志”を佐賀に集結させたい」

災害の少ない環境

ディスカッションの後半では佐賀県の事業環境が企業にどのようなメリットをもたらすのか、企業立地の観点から検証が行われた。

東洋ビューティの岩瀬氏は、佐賀進出の理由として①災害の少ない環境②アジアに近いロケーション③コスメ産業への理解④県民性と人柄の４つを挙げる。「東日本大震災で栃木工場が被災しＢＣＰの観点からリスクが低い佐賀を選んだ。将来の市場であるアジアに近く地理的優位性もある。県がコスメ産業の集積を進めていることもあり、この地ならイノベーションが図れると思った。何より惹かれたのは佐賀人の人柄だ。頑固一徹、無骨な印象だが自分に厳しくも人情あふれる。創業者が九州の方に受けた恩義を九州で返したい思いもあった。また、知事の情熱にほだされた部分も大きい」。山口知事は佐賀県の強みとして「南海トラフ地震の津波による被害想定はゼロ、明治以降震災で亡くなった人は一人もいない。水害についてもダムや河川の整備などで改善してきている」とＢＣＰ面でのメリットを強調する。

人との距離が近い

自身も佐賀出身というワイビーエムの吉田氏は「人のつながり」が事業を発展させる契機となるという。「人口は少ないがその分、やりたいと手を挙げれば知事に直接見てもらえ、中小企業にも活躍の場を作ってもらえる。実際、当社と県、大学が開発した地中熱を利用する空調設備は東京駅前のビルに採用された。新しい技術を世に出しやすい環境が佐賀にはある」

「人口は８２万人だが人口密度は16位で広島より高い。人との距離感が近く、つながりが生まれやすい環境だ。有明海沿岸道路も整備され、福岡・佐賀にまたがる広大な筑紫平野でネットワークが広がっている。今後はオープンイノベーションも進めていく」と知事は補足する。

日本オラクルの三澤氏は「ゲストに招かれ幕末の佐賀の活躍などを予習してきたが、本当にすごい土地だったのだと気付かされた。企業にとっても魅力的なエリアであることは間違いない」と感想を語った。

そろそろ佐賀の出番

繊細にして優美な有田焼、素朴で力強い唐津焼。佐賀県を代表する焼き物には「両極」の魅力があふれる。山口知事は地方進出を検討している企業経営者に向かって、こう語りかける。「佐賀は時代の節目で活躍してきた。弥生時代の遺跡が残る吉野ケ里は当時のクニの中心だった。豊臣秀吉の朝鮮出兵の際には唐津の名護屋城に２０万人をこえる人が集まった。４００年前には世界を魅了するやきもの技術を生み出し、幕末には世界を見すえ、製鉄用の反射炉を作ったり蒸気船を作ったりして近代化に貢献した。佐賀は新たなイノベーションを生みだす変革の土地だ。ＡＮＡやＪＡＸＡとの連携も始まった。そろそろ佐賀県の出番だ。コロナで変容が求められる今、これから活躍したいと思っている人はぜひ佐賀県にコミットしてほしい」

進行：小野口奈々氏

本セミナーのアーカイブ映像は下記サイトからご覧いただけます
https://channel.nikkei.co.jp/e/saga-kigyo
NIKKEI CHANNEL 検索

広　告
企画・制作
日本経済新聞社イベント・企画ユニット

■お問い合わせ　佐賀県産業労働部企業立地課　〒840-8570佐賀県佐賀市城内1-1-59　TEL:0952-25-7097
https://www.pref.saga.lg.jp/kigyoricchi/

佐賀県